

地域生活における路傍祠の現代的意義について

- 大東市における路傍祠を事例として -

大阪産業大工 ○浜田ひとみ 奈良女子大生活環境 西村一朗

目的 建築や都市などの生活環境の構成は、もっぱら生活の役に立つという機能的観点から考えられ研究されてきたが、生活環境を改めて見回すと、今まで身近にありながら見過ごしてきたものとして地蔵、小祠や地神石がある。生活環境構成要素の一つであり、地域住民が日常生活の中で守り、好ましいもの（地域の住民を守るもの）として位置づけ、機能している路傍祠を素材に、その環境物の存在する場所の特性、地域生活とそれを取り巻く都市空間の現実を明かにしようと試みる。

方法 大阪府大東市の国土地理院1/2500地図記載の記号によって表示されている路傍祠のすべてを観察の対象とする。地域の固有性をとらえるために現地踏査し、その全数の実体的データ（位置、種類、場所的特性、姿・形、管理状況など）を収集し、個々のデータや分布状況を解析する。

結果 観察調査したものは120にも上がり、かなりの密度で分布している。それらは過去の遺物として道端に放って置かれて在るのではなく、新しいよだれ掛けをかけられ、水が供えられ、花が飾られ、また秋になると注連縄が新しくなるものや祭りの提灯が点灯されるものもある。つまり、路傍祠は都市の変化を受けながらも存続し、日常のお参りや世話などの維持管理もきちんとされており、地域の日常生活環境の中で生きていることがわかった。今後、都市計画や管理者などの問題で行き場を失う路傍祠がでてくると推測されるが、それらの存続の意義が問われる。